

【地球を横切るフラミンゴ】

これ待っていた。

重なる会話、関連が読めない、と思いきや名前が重なり重なり、あれ、この人って前のあの？ と、思う間に、どんどん場面が切りかわっていく。これは、あれだ、映画だ、わたしこれ観たことあるよ、あなたもそうでしょ！と隣にいる誰かの肩を揺さぶりたくなるような感覚。

たまたまつけたテレビでたまたまたやっていた映画があつて、釘付けになって立ったまま二時間観終わつたことが、これまでに何度かあつた。この人の作品は、通り魔みたいだ。ひどいたとえしかできないけれど、突き刺さつて最後まで一気に読んでしまった。

恩田陸の『チョコレートコスモス』という長編がとても好きだったのを思い出す。

わたしの感覚は、たいてい「思い出す」に繋がっている。初めての体験でも、自分の深いところに響いた時に思うのは「何かに似ている」ではなくて、わたしはこれを「知っている」だったりする。知識として、ではない。knowが一番近い。

これを書く人にとって、名前はとても重要なのだろうか。名前があることで、そこに連続性と作品間を飛び越えるキャラクターが生まれる。書かれていないところで、その人物が別の物語を歩んでいることが想像される。

ところが、最後の最後で『神菌晴』は「役」だと言う。名前すら偽れてしまう小説の世界に恐ろしさを感じる。

ツヅくんは、あのツヅ君？花は、あの花？待つて待つて、もしかして、わたしが読んだものは、ただの予告編でしかなくて、どこかで彼らがそれぞれに生きて、軽快かつ手の込んだ仕掛けを施しているのだろうか。

絵本を描くとき、セリフと絵はたいがい一緒に出てくる。お互いに説明し合うことはせず、むしろ互いがどれだけ言わないでいられるかに一番苦心する。絵ができること、言葉ができること、絵がしてしまうこと、言葉がしてしまうこと。

この人は、どんなふうに言葉を紡ぐんだろう。もしかすると、映画のカットのように、本当に断片が見えているのかな。

終始、映像を見ているようだった。最後、対話で書き切つた、「題」に即した作品なのだと気がついた時は、現実に鳥肌が立ちました。

【おまえの光をとどめよ】

自作。

前回、どこまで説明したものかよくわからなかったので、今回は言語化できる部分について。

もうひと作品、課題作品を提出しているのだが、そちらのおおよそができた後に突然出てきたのでこちらも提出することにした。

夜中の零時に布団に入ってスマートフォンを充電器に繋いだ瞬間に、「おまえの光をとどめよ」と声が聞こえた。誰の、なんの言葉なのかと思う。絵本について説明するのは少し難しいけれども、わたしが絵本を作るとっかかりはいつも、最初に何かの言葉と見開きの絵の一部が突然見える。そのため、今回もその類かもしれないと思った。ひとまずメモに入れておこうと携帯のメモアプリを起動してタイトルとして入力したところ、そのまま全文が出てきたのでぼちぼちフリック入力を入れていく。終わった時には一時間半が経っていて、こういうこともあるんだなあとおもしろかった。

舞台は大山崎山荘美術館ではあるが、うろ覚えのまま書いていき、もう現実のものに訂正はしないことにした。

物語の「父」のモデルはおそらくわたしの伯父で、彼は画家を目指していたが祖父の猛反対に合い、結果的に建設業についた。燃やされたりはなかったが、キャンバスは実際に捨てられたりしたそうで、残っていた牛の絵を見た時の衝撃は忘れられない。絵はその後、もう描かなかったと聞いている。

母の性格も父の性格も、わたしの両親とはあまり似ていないが、運転時のやりとりはほとんど彼らと言っている。ちなみにわたしの父はまだ健在で、毎日畑に通う七十代である。

多分、わたし自身が言われたのだなと、書き終えてから思った言葉だった。何かで読んだ言葉だったかもしれないが思い出せない。

物語を描く（書く）喜びは、わたしにとっては、こういう、知らない言葉や知らない場面が聞こえて、見えてくることにある。映像が見えることも、音が聞こえることもあって、ピアノを弾いて残したりもする。

前回の「山のおそなえ」は、冒頭のやりとりが突然見えて追いかけて書いた。

今回も見せてもらえて、とても楽しかった。

## 【静寂の湖面】

あ、そうか、手紙も対話か、と当然のことなのに、最初気が付かなかつた。

「眠りについた耳」という言葉がとても心地よく、自分の体のことを思った。わたしも、心身を壊してから、身体はとても賢く優しいのだなあと、思えるようになった。無理をすれば、熱を出し、腹痛を出し、発作を出し、無理をしていると教えてくれる。

「雪」は、音を吸い込んでしまうので、雪が降る夜は本当に静かなのだと、かつて家族で行ったスキーのコテージで、真夜中に教えられた。田舎だからこんなに静かなの？という子供っぽい問いに、コテージのマスターが、それもああるけどね、今日は雪が降っているから、と穏やかに答えたのだつた。

湖面を揺らすそれは、恋や愛やと、無粋な言葉に変換される瞬間が一度もない。

声が好きだ、聴きたいとねだる、惹かれていた。たったそれだけだ。

そして返答の手紙では、湖面が波立つことはないとある。激情や、一過性の何かではない、ひたすらに静かな湖がある。

わたしは湖を恐ろしいものだと思っていて、美しいけれども自分の身のうちには持てないでいる。心の中にそういう水場や、安心の場所をもつ瞑想のようなものを聞いたことはあるが、わたしの身のうちにあるのは川に近い。

湖は深さがわからない。海と違って潮流はないため、深い部分の水温はとても低いと聞く。

真つ白な雪原を踏む音すらしない。

「音程を踏み外す」（これもまた美しい表現だ）と書いているのに、人の道を踏み外すかもしれない、と一瞬読んでしまったのは、間違いではないような気がする。

一方、先生がおそらく生涯を過ごすことになる湖面は深すぎて、本当に恐ろしい。しかしそれは彼女の結婚という報告によって、完成してしまった。

美しい物語である。

・6ページの「変わって」だけ、「代わって」ではないかと思いました。

【あるマエストラと】

思わず、フラメンコ習おう、と思つてしまった。

身体に刻まれているのが盆踊りくらいしかないわたしにとって、フラメンコは一つの憧れである。

「私たちは、自分を証明するために踊つて、歌つて、弾いたのよ」

はつとする。

大きく余白をとつて書かれた歌詞が、ずしんと響く。

ロマの歴史と文化を断片でだけ知つていても、それを生きている人の踊りを、わたしは見たことがない。

括弧で示される「わたし」の考えがとても素直で、戸惑いもわかりやすい。このマエストラは、突つぱねるようで優しい。ああ、この二人が踊るところが見たいと思う。

コンパスには軸がある。サイズは違えど全て円を描く。リズムがコンパスなのだ、というのがわたしには体感としてわからないけれど、そこに軸があることと、全てが同じ形を描いているのはわかる。

「自分の中のリズムの輪を回して」

身体表現を言語化する、大変な試みの文章である。身体の内側に存在するそれと繋がつてみたい。

あとがきには驚いたけれども、そうかこれもありなのかと膝を打った。

マエストラとの会話と合わせて、どれほどの経験なのか、深く伝わってきた。

・最後のエツとの出会いでの会話で、改行の間隔が多く、ゆったり話しているように感じられました。エツはむしろ勢いを持っているような気がするのです、ここはもつと詰めてみてはどうでしょうか。

・「!」「?」などの後の半角あけがあると、もう少し読みやすく感じると思います。

【庭】

手紙形式の短編がもう一つあるなど、これも落ち着いて読み進める。タイトルの庭から、庭の植物の名前が豊富で、初めこそ、目に楽しい。

ところが、返事がないまま次の手紙、次の手紙と続くようになってくると、もうすでに苦しさが込み上がってくる。

返事をねだつて次々と送る文面の庭の様子は、すでに「私」のことになりつつある。

先生からの返事は、本当に身勝手に、果たしてこの二人はどのような関係なのかと思う。家と庭とをそのまま受け取るなんて、「君」「先生」と呼び合う仲は、なんなんだろう。

庭は、手入れをしなければ一瞬で荒れる。人が入らなくなった家は、ものの数年で植物たちに覆われる。

これは、何の話だろうか。先生への恋の終焉？ いつも考えてしまう。そんな生やさしいものではないのでは、と。

手紙を焼き捨てても、一度伸びた根は知らず遠くまで這って行くでしょう。

彼女の最後の手紙は、別れの結びであるけれど、そこに描写されるのは美しい庭ではなく、強い強い生命力の塊である。

庭への愛情、一転して先生からの最後の手紙による落胆の描写は、胸が痛かった。

余談ではあるが、勤め先のギャラリーには立派な庭があつて、毎日緑を眺めているのは本当に目が癒される。驚くほど気温と日の長さに合わせて生きる彼らは、強かで、可愛らしく、また貪欲だ。生きている、ということは、かくも胸を打つものか、と、何でもない日にびっくりしたりする。

ちなみに、こういう短編を読むと、「先生」をこてんぱんにしたくなってしまふ。（こてんぱん、がどんな状態かは、各々の判断にお任せします）

## 【みずうみ】

自作二つ目。ひたすらみずうみを眺めながら、妻を待つ男が見えたので、それを追ってみることにした。最初に出てきたのは「一」のトルテとグラス。そのまま会話を続けていく。

出てくるままに書いていくと、自分でもよくわからなかったことが一つずつわかってきて、面白い。

「みずうみ」が「湖」でないのは、それが地形を示すものだけに感じられなかったからで、打ちながらどうしても漢字変換することができなかった。

随分書いてから、墓守と教会の関係がよくわからなくなってきた、少し調べてみる。ヨーロッパでの村むらで、墓は集落ごとに存在したようで、教会の敷地とは別にあつたと記述がある。しかし、葬儀を執り行うのは教会の司祭（神父）で、個人で石板がある町と、まとめて墓にする農村とで分かれている。流行病があつた折には、遺体の回収の仕事は嫌われ、墓とは別の穴に集められたとある。

トルテは、みずうみからは遠く離れた地からやってきて、南の村で漁師になり、足を失って北の崖上の墓守になったと、書き進めてわかつた。

アルカの性格は全然わからなかつた。彼女が本当にはどこへ行つたのかも、わからなかつたが、手紙に別の人と逃げるからトルテも逃げてと書いたのだけわかつた。けれどもそれが事実かはわからない。彼女には薬師の才があつたようで、それもあつてトルテと共に薬草園を育てていた、というのはわかつた。

最初は、トルテが一人、最後まで花を守って美しく死んでいく物語なのだと思つていた。

だけれども、「六、あるいは別の話」の少女が、それらを軽く吹っ飛ばしてくれた。

その後の墓を想像していると、突然「ここは何？」と尋ねる娘が現れて、彼女は一瞬でその花畑の美しさを見抜く。

綺麗ねえとでもいうのかと思えば、彼女は非常に怒つていて、書きながら笑つてしまった。そうかそうか、トルテを可哀想な人にしてしまつていたのはわたしか、それなら彼女が怒つているのはわたしに対してか。

みずうみからは、この花畑はどう見えるのだろうねと思えば、彼女が見にいくという。

トルテはどこに行つたのかねと思えば、彼女が探すという。

諦めた男だとばかり思つていたトルテが、どこか遠くまでアルカを探して、泥臭く人間臭い姿をさらしているのかもしれないと、書いているわたしが不思議とうれしくなつて終わつた。

物語では、人は簡単に死んでしまう。死んだといえは、そこで終わつてしまう。ずっとその、書き手の強すぎる権限に疑問を抱いてきたけれど、もしかしたら、彼らはもつと強かで、自由で、どこまでも走つていくのかもしれない、と、小さく思つた。

【静謐の】

シンプルな会話で、いつそ潔い。

いくらでも伏線やなんやを入れられるはずなのに、それを入れないのが、とても心地よかった。

何かの舞台のセリフで、役者によっていかようにも変容するお手本の台本みたいだなと思う。

ああ、来てくれたんだなあ。

終わりの時に、できることなら挨拶したい人が何人かいて、こんな会話が本当はいろんなところで行われていたらいいなと思う。

お別れができるのは、幸福だ。

とてもお世話になった大叔母は、わたしの乗ったタクシーが着く直前に逝ってしまった。到着して、その手をとって、まだ温かいのが不思議でたまらなかった。祖父も、祖母も、気がいたら冷たく綺麗な顔になって箱のなかにいた。

親の死に目に会えない、という迷信が怖くて、実は今も夜に爪が切れない。

高校生の時、容体が急変した祖母の連絡を受けて、家族全員が父の実家である佐賀に向かうことになったとき、自分だけが定期考査で遅れて行った。

「自分の死がお前の勉学の妨げになることをおばあちゃんは喜ばない」

と言ったのは父で、私はその言葉に従ったけれど、死に目に間に合わず、それが自分にとっての本当だったのかずっとわからなかった。後悔していたのだと思う。

だけれども、大学生になって、心身を患ったある夜、一人で不安に襲われている真夜中に突然、誰かに頭を撫でられた。顔を上げて、一人暮らしの部屋にはもちろん誰もいなかったけれど、わたしはそれが間違はなくおばあちゃんだと確信した。その晩は、おばあちゃんが「いいのよ」という声を聞いた。何がなか、よくわからなかったけれど、許されたと思ったし、わたしはその時ようやく、祖母とお別れができたと思っただ。

お別れはしたけれども、その後も何かを守られている感覚は続いて、本当に大変なことが起こった時でも大丈夫な気がしている。

だから、いつか終わりが来たら、できたら消えてしまわないで、何か誰かの大丈夫なものになれるといいなと、思ったりもします。

これが、本当に強烈で、びつくりしながら読んだ。絶対に現役の介護士さんの書いたものだと思ってしまう。なんていうジャンルになるの？ノンフィクション？記録？日記？いや会話だから……、と小説の懐の深さにも驚く。何にせよ、説得力がすごい。笑い飛ばすところまでの、コートが出てない、座薬かな？のあたりから、おそらくそこに辿り着くことが感じられたけれども、そこまで書かなくちゃ、そのあとの「ありがとう」で笑い泣けない。

まず、申し送りがリアルで、何なら単語がわからない。それから全員のテンションがとても元気なのに驚く。そういえば、祖母が入居している施設の方はこんな空気だった気がする。

技能研修生がいるのにも、面食らった。そうか、そうだった、ニュースでしかみなかった現実がここにあった、と何度も頷く。

「笑声」

という単語は、生まれて初めて聞いたが、これもまたヒエンさんの返事に、うんうんと頷いた。自分が勤める職場も接客業であるため、電話対応での声の出し方にはとても気を使い、わたしは必ず笑顔で話すことにしている。マスクで接客するのが当然になってからというもの、表情も伝わりづらいので、オーバーリアクションに磨きがかかる毎日である。

入所者さんたちの、お返事が、会話になっていないような、もどかしさを感じる。それでも対応するスタッフたちの笑声まで常に聞こえるような文章にも驚く。

妹が勤める特別支援学校では、何かの動作の補助にしょっちゅう歌うのだと聞いた。現在産休と育休をと一歳児を育てる母になった彼女は、息子と何をするにもたいてい歌にってしまう。それが、延々と続くので、彼女の才能にも驚いてばかりである。

「まあ、ウメノさんなら全然かまへんです。ご利益ありますから」

こんなふうを受け入れる精神があるのって、すごいなあと素直に思う。お気に入りの「シャツの件はヒヤリとしたけれど」。

・フォントが太字で、すこし見づらく感じたので、シンプルな明朝でも良いかもしれない、と思いました。  
・声の大きさがフォントの大ききで表現されているのに、最初こそぎよつとしましたが、読むほどこれでは表現できないかと、感心しました。おもしろかった。



【最後にかじったりんごの味は】

手書きのタイトル、まずずるい。やられた。若い感覚。

メールやチャット、インターネットを介したテキストのやり取り。

名前が出てこないのにもやられた。匿名のメールでのやり取り、相手が「誰」であるかが重要ではなく、眠れないことの一種の潰しの時間の会話が続く。

また、その会話が、とにかくスタイリッシュ。このまま映画の広告とかになってしまいうんじやないのかと、意味があるのかないのかギリギリの会話。互いを知りたいような、知りたくないような、距離感が絶妙で、互いに無自覚に駆け引きをしているような、気がしてくる。

恋愛についての相談なのか、と思いきや、それを締めるように「宇宙にありそうなことわざ」が続く。そんなの思いつく？一瞬想像してみたけれど、何も浮かばなくて自分のセンスのなさに落ち込むのでやめて読み進める。ラロリー、使いたい。

お互いに、何かについて感じたこと、考えていたこと、自分のことを、突然ぼつりと話すのが、恋愛初期の二人のように感じられて、なのにごく空虚に思えて、その空気が不思議で仕方ない。楽しそうなのに、女は破滅を願っているような、孤独の輪郭を崩せないでいるような、おかしなバランスの上で、ゆらりゆらり進むおしゃれな会話が、心地いいと怖いとを行き来する。

事態は突然で、想定通りに起こる。そこから何があつたのかも少し想像はできるけれども、女は男から離れていて、男はどこか自分に酔ったようなメールを送る。なるほどなあ、と思っていたのに、最後の最後の極め付けの「眠れません」に芯までやられる。

健全とか、正しきとか、大きな声の何かでは語れない、宇宙の隅っこで繋がった二人。この読後感は、なんて言えばいいんだろう。

心からぞつとしたのが実のところ正直な感想で、インターネットが普及し、SNSが当たり前になった頃の二十代、この二人から会話のセンスだけを無くしたような関係を、真夜中に人と築いたことがある。どこにも辿り着けないそれは、自分がどこに行きたいのかわかるまで続いて、楽しいのに恐ろしかった。

剥いたりんごを美味しく食べてもらえたらうれしいし、相手のそれも美味しく感じられたらうれしい。けれども今は、眠れない夜に誰かと繋がらなくては、という焦燥感のようなものを特に感じ無くなった。小さい大人になったのか、大きい子供になったのかと、自分のことをなぞるように最後まで読んでいました。

## 【花のような花】

講評は必要ないと書かれていたものに、感想を言いたくて筆をとる。(PCをタイプするのも、これで表現していいのだろうか)

花が溢れた、と聞いて最初に想像したのは木蓮で、落ちたそれを髪に挿したのを読んで、木蓮ならあの分厚い花弁がバラバラに散ってしまうから違うと知る。そしたらもう、なんの花かわからなくなってしまい、とても、抽象的な「花」をイメージした。

この人の小説の世界は、説明が詳細で、明確で的確で、「現在」を生きる人の言葉だなと思う。インスタ用の写真を撮る場面が、本屋の一風景として成立するようになったのかと、まずそれに驚いたりする。

何かを販売する仕事をしたことのある人は、その場にいる人たちの何から情報を得ているのだろうか。この人は買うなあ、この人は話が長引くなあ、この人は冷やかしたなあ、この人は長いおつきあいになるなあ。万引き、の空気を感じたことはないけれども、それぞれの纏う動作の言語について、ここまでの確に書かれるとマニュアルにしたくなってしまふ。

そして何より、このモモがいい。モモという名前もいい。モモが、本屋で働いているなんて。そして、花だ。もうマイスター・ホラとカシオペアが見えてくる。

「体積に対して相応しい質量がないと、とても不安になる」

ここで、自分が感覚的に抱いてきたものをあまりに的確に言語化されて、閉口した。

そしてこの後に、今回現実の文芸部の提出作品として読んだはずの短編が、花によって書かれたものだと示す文章が続く。

花のインタビューで書かれたモモの話は、この短編ではないのだろうか。「花のような花」と続くからは、これはモモによって語られた言葉なのだろうか。

本当の本当は、言葉を並べる快楽と、現実との混同にわたし自身は恐怖を抱いている。言葉は、丁寧なようにみえて、それぞれの単語がもつイメージにいくつもの存在を固定してしまう。定義なぞ人それぞれで、固定などされるはずもないものを、そこに縫い止める可能性がある。

言葉を紡ぐのは楽しい、が、怖い。強すぎる。全く適確な感想ではないかもしれないけれど、この人の言葉に身を浸す覚悟がないなら、身を守る術を持たなくてはならないと感じた。

自分が書けないもの、ではなく、書かないもののことを強く思うようになった。